

2017.9.21 動物園動物の獣医学 3

動物園動物の健康管理



動物の健康管理とは？

- 肉体的だけでなく心理的にも健康であるように飼育する。

動物園動物の健康管理の特徴



1. 予防医学が基本
2. 捕獲、保定、治療は飼育係と獣医師の協働作業
3. ゆりかごから墓場まで
4. 病理解剖の実施

治療するべきか、するべきではないか。

捕獲、保定、麻酔によるストレス
群れでくらす動物を治療のために引き離す必要

治療することによるメリットとデメリットを評価する

治療対象としての動物園動物の特徴

患者は主に野生動物

野生動物はうそつき

痛みに対する感覚が異なる

保定が困難

個体識別が困難

臨床例が少ない

疾病予防が大切

予防医学が前提

病気を予防するほうが治療を成功させるよりはるかに容易

動物が示す病気のサインに気づく

動物は病気を隠す本能をもっている

普段とどこか異なる・・・主観的な感覚

疾病の原因

飼育管理上の問題

- 飼育環境の衛生管理
- 捕獲時、輸送時の事故
- 飼料
- 有毒植物
- 遺伝的多様性の低下

動物舎などの環境整備

- 飼育環境を清潔に保つ
ex. 汚水・汚物の除去
- 動物舎などのつくりが事故につながる
ex. 天井に衝突
- 換気、照明、温度、日照

動物舎などの環境整備

- 放飼場の異物、毒草

ex. アセビ中毒

- タヌキ、イタチ、キツネ、イヌ、ネコの侵入

ex. 猫汎白血球減少症、食害

- クマネズミ、ドブネズミの駆除

ex. レプトスピラ症、エルシニア症：

Y.enterocolitica, Y.pseudotuberculosis

飼育環境の衛生管理

飼育施設の清掃

日々の清掃

高圧洗浄機の問題

糞成分を空中に巻き上げる

飼育施設の消毒

フェノール系はネコ科動物に中毒

次亜塩素酸ナトリウム

飼育環境の衛生管理

衛生動物の制御

ゴキブリ、ヘビ、ドバト、カモメ、カモ、
ネズミ類、キツネ、タヌキ、イタチ、イヌ、ネコ

餌や巣箱を巡り、動物園動物と競合する。
病気の媒介

食害(動物園動物を捕食する)

寄生虫対策

外部寄生虫

体表に寄生: ハエ、ノミ、シラミ、マダニ、ダニ

内部寄生虫

消化管等体内に寄生

蠕虫類

吸虫

条虫

線虫: 回虫

原虫: コクシジウム



ニホンアカガエルの肺虫

遺伝的に健康な個体の選択

- 遺伝的多様性の確保
- 科学的な交配計画に基づいた繁殖計画
- 日本動物園水族館協会・種の保存委員会の活動
- 国内だけでなく国際間の協力・連携が必要

感染症の予防

- 予防液(ワクチン)の投与
- 死菌予防液
- 生菌予防液
- 生ウイルス予防液
- 不活化ウイルス予防液
- 遺伝子組み替えワクチン

展示動物（動物園動物）の検疫

哺乳類約5,000種、鳥類約10,000種が分類されている。
法律に基づく動物の検疫対象は限られている

家畜伝染病予防法

偶蹄類、馬、ウサギ、
キジのなかま、アヒル
鳥類

狂犬病予防法

イヌ、ネコ、アライグマ、
キツネ、 スカンク

感染症法

サル

動物に関わる者の健康管理

- 日頃から自分の健康に留意する
- 日和見感染が多い
体調のわるい人
子供や高齢者
- 人と動物の共通感染症について知識を持つ
- 糞や排泄物を素手でさわらない
- 動物舎を清潔に保つ
- 産業医との連携